

雑誌『LANDSCAPE DESIGN』における 特集記事の動向

林穂乃花¹・尾野薫²・山中英生³

¹ 学生会員 徳島大学大学院 先端科学研究科 (〒770-8506 徳島市南常三島町2-1,
E-mail: c612131014@tokushima-u.ac.jp)

² 正会員 宮崎大学 地域資源創成学部 (〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西1-1,
E-mail: kaoru_o@cc.miyazaki-u.ac.jp)

³ 正会員 徳島大学大学院 社会産業理工学研究部 (〒770-8506 徳島市南常三島町2-1,
E-mail: yamanaka.hideo@tokushima-u.ac.jp)

日本において、「景観」や「Landscape」という言葉は多様な分野において使われており、「景観」という言葉の定義には、各分野における相違点や共通認識がある。もし、整備された空間における「景観」の意味するものとその動向を明らかにすることができれば、今後の「景観」を意識した整備において重視すべき視点等が明らかにできると考え、本研究では、分野を横断して作品を取り扱っている雑誌『LANDSCAPE DESIGN』の特集記事を対象として、整備された空間における「景観」の意味するものとその動向を明らかにすることを目的とする。まず、各特集記事を分類・時系列に基づいて整理し、可視化を行った。その結果、特集記事のうち動向に特徴のある6項目について、その動向を明らかにした。

キーワード: 可視化, 記事分析, 雑誌『LANDSCAPE DESIGN』, 動向把握

1. はじめに

(1) 背景

2003(平成15)年7月、国土交通省から「美しい国づくり政策大綱」が公表された。大綱の前文より引用すると、「戦後、我が国はすばらしい経済発展を成し遂げ」「国土交通省及びその前身である運輸省、建設省、北海道開発庁、国土庁は、交通政策、社会資本整備、国土政策等を担当し、この経済発展の基盤づくりに邁進してきた」と戦後日本の国づくりについて、「まさに奇蹟である」と讃している。

一方、「我が国土は、国民一人一人にとって、本当に魅力あるものとなったのであろうか？」と疑問を示し、「都市には電線がはりめぐらされ、緑が少なく、家々はブロック塀で囲まれ、ビルの高さは不揃いであり、看板、標識が雑然と立ち並び、美しさとはほど遠い風景となっている。四季折々に美しい変化を見せる我が国の自然に較べて、都市や田園、海岸における人工景観は著しく見劣りがする」と、我が国の景観を痛烈に批判している。さらに、この大綱では美しい国づくりのための施策展開として15の具体的施策を明記し、これらの諸施策は各方面で実施されていった。その中でも翌年2004(平成16)年6月に公布された景観法の影響は大きなものである。この

ように、近年景観に対してその質や在り方が問われ、景観に関する法律・計画等の見直しが進められてきた。

日本において、景観やそれを意味するLandscapeという言葉は多様な分野において使われている。景観・ランドスケープに関する各分野の学会における委員会の活動や研究を知るため、例として土木学会、建築学会、造園学会、景観生態学会の公式サイトから設置目的や活動内容を表-1にまとめる。

土木学会景観・デザイン研究会では、景観の定義については触れていないため、「景観とは人間をとりまく環境のながめにほかならない」¹⁾という中村による定義を引用する。建築学会では委員会名にもある「生きた景観」についての記述が主だが、設置目的にある「景観研究は(中略)都市デザインの基礎ともなる」のように、建築にとっての景観とは、都市デザインとしての景観という意味合いが大きいように捉えられる。造園学会では「人間と土地・自然との関わり方が眼に見える形で示されている全体的な姿を、ここでは「ランドスケープ(Landscape)」と呼びます(風景や景観と同義ですがそれぞれに意味の幅があり、より広い意味でランドスケープを使います)」とあり、景観生態学会では「「景観」は、森と草地のような異質な生態系(景観要素)がモザイク状に分布する空間の、全体的なシステムです」と述べら

れている。

以上のように、分野やその学会によって、景観・ランドスケープの概念や視点には違いはあるが、造園学会と景観生態学会の記述のように、景観・ランドスケープがその言葉のままの意味だけでなく、マクロからミクロ、ハードからソフトといった、目に見えないものまで含めた全体的な空間を意味するものであるという共通認識があると考えられる。柴田らは、「景観」をキーワードに、景観に関連する研究論文を分野横断・網羅的に収取・整理し、近年の景観研究の動向を明らかにした²⁾。このように、研究論文を分析対象として分野横断・網羅的に整理することは、時代に即した景観の解釈や研究ニーズ、社会動向を知る上でも必要不可欠であると考えられる。しかし、これらの動向はあくまでも研究論文が基盤となっており、整備された実空間における「景観」という言葉が指すものが何か、ということをつ捉えたことにはならないと考えられる。もし、実際に整備された空間を各学会・各分野における「景観・ランドスケープ」という言葉に

基づいて分析し、動向を明らかにすることができるならば、「景観」という言葉を通して整備された空間の動向を明らかにすることができ、今後の整備において必要となる「景観」の概念を明確にすることができるのではないか、と考えるに至った。

(2) 既往研究の整理

柴田らは土木学会、建築学会、造園学会にから発表された景観研究論文を系譜図にまとめ、「景観研究は多くの学会で盛んに行われている一方、多面化・複雑化している」と述べている。また、上原らは景観生態学会における景観生態学(ランドスケープ・エコロジー)の論文と造園学会におけるランドスケープ研究の論文を比較し、共通点や課題点を示している³⁾。このように各学会ではそれぞれにランドスケープ研究が行われ、研究を通して分野横断することや、個別の作品を通して変容を探る研究が行われている。

表-1 各学会の活動と景観に関する記述

	設置目的・活動内容等	「ランドスケープ(景観)」について
土木学会(景観・デザイン委員会)	【1997年設置】官民、大学および研究機関、民間、関連学会との有機的連携のもとに、土木構造物およびそれらによって形成される空間を質の高いものとしてつくりあげるために、景観・デザインに関する調査研究をおこなうとともに、良好な景観形成を実現するための施策や具体的方法の提案、実現されたものの評価などをおこなうことを目的とする。	景観とは人間をとりまく環境のながめにほかならない (委員会での定義がないため、中村良夫より引用)
建築学会(生きた景観マネジメント委員会)	【2013年前身より名前を変え設置】景観研究は日本建築学会において多数の投稿論文を集める領域であり、都市デザインの基礎ともなる。人口減少や外国人観光客急増といった状況により、景観まちづくりは都市魅力を醸成・創出し、都市をリバイタライズする手段として実効力が期待される。そこで本小委員会では、活力ある都市を実装、可視化する「生きた景観の創造とマネジメント」を展望し、研究、課題抽出、提案を行うことを設置目的とする。	「生きた景観」とは、「生き生きとその都市を物語る景観」であり「都市の営みの象徴」「市民らによる自律的創造」「使い手の視点に立ったマネジメント」が重視された景観である。都市の魅力を生み支える計画技術である「生きた景観の創造とマネジメント」は、東京オリンピックを2020年に控え、タイムリーな取り組みとして位置づけられ、学会の社会的使命として重要と考える。
造園学会(ランドスケープ遺産)	ランドスケープ遺産保全委員会【1989年設置】：価値あるランドスケープ遺産が周辺を含む開発計画等によって改変や消失が予想される際など、学術的立場からその保全・継承について要望・提言等を行っています。ランドスケープ遺産研究委員会【1998年設置】：人と土地・自然の関わりなどの諸相の表れである多様なランドスケープについて、次世代に継承していくための遺産と位置づけその価値の捉え方などについて議論を重ねています。 ランドスケープ遺産インベントリー作成委員会【2010年設置】：全国の多様なランドスケープ遺産を確認あるいは見出して評価し、目録として記載し、環境保全やまち・むらづくり等に活用し得る基礎的情報を整備することに取り組んでいます。	人間と土地・自然との関わり方が眼に見える形で示されている全体的な姿を、ここでは「ランドスケープ (Landscape)」と呼びます (風景や景観と同義ですがそれぞれに意味の幅があり、より広い意味でランドスケープを使います)。それは物的な環境自体のことではなく、人とそれをとりまく世界との関係の表れを指します。さらにそれは単に関わりあいの結果としての姿というだけでなく、生産・交易・祭祀などの暮らしの拠りどころとなるための価値ある環境が求められながら、自然と人為の相互作用によって積み重ねられてきた文化の表れであるといえます。ランドスケープは土地の上に繰り広げられる人と自然の関わり方の姿です。
景観生態学会	【1992年設立】日本景観生態学会の使命は、生態的土地利用施策、国土・地域のエコロジカル・プランニング、生態系管理の基礎となる景観生態学を発展させていくことです。景観の構造やプロセスに関する理論の構築、土地利用計画への応用、景観や生態系の保全・修復活動の実践、といった景観や空間の諸側面に興味を持つ研究者、技術者、行政担当者、市民・NPO等の情報交換を促進し、そして、理論やツールを様々な場での問題解決に使えるようにしていくことを目指します。	「景観」は、森と草地のような異質な生態系(景観要素)がモザイク状に分布する空間の、全体的なシステムです。池の周囲が森に囲まれている場合と草地に囲まれている場合では、池の中の生物の種類は異なるでしょう。結果として、その池が地域の中で果たす役割(機能)は異なることとなります。また、地域の中にある森の面積が同じであっても、それが1つの森としてまとまっている場合と複数にわかれている場合では、森の中の生物の種類は異なり、そして森が持つ機能も異なることとなります。このように、景観に含まれる生態系(景観要素)の空間配置と生態系のプロセスや個々の生態系が持つ機能の間には密接な関係があります。景観は、人間活動の影響を受けて大きく変化します。

雑誌の記事内容の推移から変遷や動向を分析した研究として、『新建築』を対象として戦後の建築家たちの現代建築に関する創作の主題の変容を明らかにすることを試みた奥山・持田・坂本らの研究⁴⁾や、英国園芸雑誌『Gardeners Chronicle』を対象として日本庭園に関する記事を分析し、英国での日本庭園の変遷と年代ごとの記述内容の比較を行った熊倉・柴田らの研究⁵⁾がある。

このように、実空間が掲載されている雑誌から時代の動向を明らかにすることは、研究の動向を明らかにした柴田らの研究にも共通する点が多い。しかし、雑誌記事を対象として、分野を横断し、総合的に研究したものは管見の限りない。

(3) 本研究の目的

以上より、本研究では分野を横断して作品を取り扱っている雑誌を対象として、整備された空間における「景観」の意味するものとその動向を明らかにすることを目的とする。

2. 分析対象の抽出及び分析手法

(1) 雑誌『LANDSCAPE DESIGN』

雑誌『LANDSCAPE DESIGN』⁶⁾は1995年にマルモ出版から丸茂喬によって創刊された日本唯一のランドスケープ専門雑誌である。前身は、日本造園コンサルタント協会の機関誌から商業誌になった『JAPAN LANDSCAPE』であり、「ランドスケープ」という概念を造園以外の都市計画、土木、建築、環境デザインなどの分野に広めていくことを大きな目標にスタートした雑誌であった。比べて、『LANDSCAPE DESIGN』は、「阪神・淡路大震災を教訓に、「カタチ」あるモノはいつか崩れる。「カタチ」のみを追究するのではない「地球環境時代」と呼ばれる世紀に向けて、新しいランドスケープの可能性として「人と自然が呼吸する」をコンセプトにスタートした雑誌である。読者層は建築家、都市計画、土木に携わる専門家から、2004年の誌面リニューアルを経て民間にまで広がっている。

主に、景観・ランドスケープ作品の事例紹介や専門家らによる連載、テーマに基づいて組まれた特集記事で構成されており、その他にもコンペやコラム等も掲載されている。こうした特集は造園技術的な話題だけではなく、生物多様性や建築的視点、交通処理のような土木的視点など多岐に渡っており、様々な分野を横断した雑誌であると考えることができる。

以上より、日本唯一のランドスケープ専門雑誌であり、「建築」「造園」「土木」など様々な分野を横断して作

品を取り上げている『LANDSCAPE DESIGN』に着目することとした。

(2) 分析対象の抽出

本研究では、1995年の創刊から2020年までの25年間に発行された135号のうち、特集記事を対象として制定した。これは、特集記事は掲載当時の社会背景や時代の潮流等を反映されて組まれていることが多く、動向として分析することができると思ったからである。ただし、1年に渡って掲載した既出作品を紹介する「ランドスケープワークス」の企画については、総集編として既出の作品を取り扱っていることが多いため、分析対象外とした。また同じ号に2つ以上の特集が組まれている場合は、それぞれ別の特集として抽出した。以上より、本研究では全135号で合計137の特集を分析対象として抽出した。抽出結果を表-2に示す。

(3) 分析対象の分類

抽出した特集記事について、特集タイトルとリード文から「どんなテーマに基づいて組まれたのか」に着目して分類する。特定の街や都市・イベント・テーマパーク等を取り上げた特集記事は「特定エリア」と、日本以外の国や地域を一つのテーマとして、景観・ランドスケープの事例紹介を行った特集記事は「海外事例」として定義した。その結果、137の特集記事を17分類にわけることができた(表-2・3)。

(4) 特集記事の動向の可視化

各分類における動向を明らかにするため、各特集記事を分類・時系列に基づいて整理し、可視化を行う。可視化の手順は、下記の通りである。なお、今回は特集記事数の多かったもの、動向に特徴があるものとして、「まちづくり」「建築・施設」「造園・庭」「都市」「環境・生態系」「防災」の6分類に着目する。作図手順を下に示す。

- a)横軸を時間、縦軸を分類とし、特集記事を丸でプロットする。同じ年に同じ分類の特集記事がある場合はまとめて示す。
- b)特集記事が「土木」「建築」「造園」「環境」の4つではどの分野に当てはまるのか、凡例のようにプロットした丸を色付けしてゆく。ここで、ソフト面について述べられている特集などこの4分野に当てはまらないものは灰色で色付けし、また複数当てはまる場合は全ての色を色付けする。
- c)プロットし色付けした丸の周りに、その特集記事におけるキーワードを書き込む。

上記手順に従い可視化した結果を、図-1に示す。

表-2.1 分析対象のリスト(前半)

No.	特集タイトル	分類	キーワード
1	緑と都市の景	都市	公園・緑地・防災
2	東京ベイエリアの景	都市	水辺
3	バリアフリーの景	技術・機能	バリアフリー・ユニバーサルデザイン
4	インドアガーデンの景	造園・庭	インドアガーデン
5	コンピュータがつくる景	技術・機能	コンピュータ
6	遊びの景	その他	遊び・ID
7	緑を生かす住宅の景	集合住宅・団地	緑・住環境
8	景観シミュレーションの景	技術・機能	ソフトウェア
9	エコ・デザインの景	環境・生態系	里山・保全
10	まちづくりルネサンスの景	まちづくり	都市・交通
11	水を生かす環境デザインの景	環境・生態系	河川・水
12	ユニバーサルデザインの景	技術・機能	バリアフリー・ユニバーサルデザイン
13	コミュニティをつくる緑と住宅の景	集合住宅・団地	緑・コミュニティ
14	GISとコンピュータ活用の景	技術・機能	システム
15	環境教育の景	環境・生態系	教育
16	医療施設の癒し環境	建築・施設	医療
17	集合住宅の中庭	造園・庭	中庭・集合住宅
18	商店街が生きる街	まちづくり	商店街・コミュニティ
19	土地を生かした住環境	集合住宅・団地	土地開発
20	建築と自然を結ぶ「庭」	造園・庭	建築
21	屋上緑化デザインの動向	緑化	都市・建築
22	コミュニティガーデンとまちづくり	まちづくり	コミュニティ・庭
23	歴史文化遺産の再生	歴史文化	遺産・再生
24	IT時代のランドスケープ業界	技術・機能	IT
25	福祉環境のユニバーサルデザイン	技術・機能	ユニバーサルデザイン・福祉・緑
26	都市と里山の森づくり	森林・里山	再生・保全
27	景観素材now	技術・機能	素材
28	建築のランドスケープ	建築・施設	造園
29	水世紀の環境づくり	環境・生態系	水辺・水
30	都市建築の屋上庭園	緑化	都市・建築・庭
31	新時代のランドスケープアート	その他	パブリックアート技術
32	六本木ヒルズ	特定エリア	都市開発
33	公園を100倍楽しむ方法	都市	公園・遊び
34	みんなの学校	建築・施設	学校・キャンパス
35	浜名湖花博を楽しもう	特定エリア	イベント
36	マンションが作る街	集合住宅・団地	マンション
37	すべてのみちは森に通ずる	都市	森林・緑地
38	躍動する中国のランドスケープ	海外事例	中国
39	時代を創る丸の内ランドスケープ	特定エリア	再開発
40	きもちいい街路・ストリート	街路	ストリートファニチャー・街路樹
41	愛地球博	特定エリア	テーマパーク・マネジメント
42	売れるマンションランドスケープ	集合住宅・団地	マンション
43	人と緑とアートの街づくり	まちづくり	緑・アート
44	リゾートを巡る冒険	特定エリア	リゾート
45	私が公園に行く理由	都市	公園・市民参加
46	イサム・ノグチのDNA（モエレ公園）	都市	公園・アート
47	オフィスビルとデザインの出会い	建築・施設	オフィスビル・屋上庭園
48	北欧のランドスケープデザイン	海外事例	北欧
49	東雲から見える未来の街	特定エリア	暮らし
50	新宿御苑 開園100周年の軌跡	特定エリア	歴史文化
51	癒しの温泉ランドスケープ	特定エリア	温泉地
52	商業施設のオープンスペース	建築・施設	商業施設・オープンスペース
53	アメリカのランドスケープ	海外事例	アメリカ
54	永く気持ちよく住み続ける集合住宅	集合住宅・団地	住環境
55	今、ユニバーサルデザインを語る	技術・機能	ユニバーサルデザイン
56	空の下で楽しむ東京ミッドタウン	特定エリア	再開発
57	ユニバーサルデザインを考える	技術・機能	ユニバーサルデザイン・まちづくり
58	私を解放するキャンパススケープ	建築・施設	キャンパス
59	灯りのランドスケープ	光	パブリックスペース
60	駅・駅前広場の新時代	都市	駅・駅前広場
61	デザイン装置に見る駅前のランドスケープ	都市	駅・ID
62	「生きる」「活かす」観光リゾート ランドスケープアーキテクトの企	特定エリア	リゾート
63	「中国へ」和暦社会へ向かう中国にランドスケープからの提言	海外事例	中国
64	光、風、そして緑の墓地公園(いま求められる安らぎのランドスケープ)	都市	墓地
65	「緑化」の価値 企業が示すランドスケープの可能性	緑化	CSR
66	北海道 ランドスケープがつくるエネルギー	特定エリア	北海道
67	生活と庭-自然を取り込むランドスケープデザイン-	造園・庭	暮らし
68	景観と「まちづくり」	まちづくり	都市

表-2.2 分析対象のリスト(後半)

No.	特集タイトル	分類	キーワード
69	テーマパークに学ぶランドスケープ・マネジメント	特定エリア	テーマパーク・マネジメント
70	変わりゆく医療・福祉の環境デザイン	建築・施設	医療・福祉
71	光景をデザインする	光	ID
72	都市と森をつなぐ 里山再生と活用のアイデア	森林・里山	再生・都市
73	緑化のデザイン力	緑化	デザイン・技術
74	現代につなぐ 庭づくりの精神	造園・庭	日本庭園
75	生物多様性の風景デザイン	環境・生態系	生物多様性
76	(なぜ、緑が必要なのか)緑の考現学	緑化	思想
77	(自立できる地域を目指す)小さな町のまちづくり	まちづくり	地域
78	生物多様性の開発デザイン	環境・生態系	生物多様性
79	これからの都市デザインに求められる公園のような居場所	都市	公園・パブリックスペース
80	新しい都市のイメージをつくり出す都市緑化とリノベーション	緑化	都市
81	(ランドスケープから捉える)パブリック・デザイン	技術・機能	デザイン
82	サインデザイン	技術・機能	デザイン
83	アジアのランドスケープ	海外事例	アジア
84	現地で動き出した震災復興計画	災害・防災	治水・災害復興
85	(街と鉄道をつなぐ)駅のランドスケープ	都市	駅・街
86	東京と大阪から見る水辺都市の復活	都市	水辺
87	人が支える復興支援・計画	災害・防災	災害復興
88	安全で心地よい公園のランドスケープ	都市	公園・市民参加・ID
89	特別養護老人ホームの「新しい風景」を求めて	建築・施設	福祉
90	緑とオープンスペースの価値	都市	オープンスペース・緑地
91	東京スカイツリータウンと街づくり	特定エリア	まちづくり
92	緑の果実がふきぬける美しい東京の公園へ	都市	緑
93	団地再生とシティスケープ・デザイン	集合住宅・団地	再開発
94	全国都市緑化フェアTOKYOREPORT	特定エリア	東京
95	街をリノベーションする	まちづくり	リノベーション
96	公園をもっと楽しくパークマネジメントの手法	都市	公園・ID・マネジメント
97	遊び環境を考える	その他	遊び・環境
98	ランドスケープと照明デザイン	光	ID
99	今、欧米で話題の環境先進都市	海外事例	環境・生態系
100	ヨーロッパのアーバンデザイン	海外事例	ヨーロッパ(欧州)
101	大阪にセントラルパークを！	都市	都市・再開発
102	LANDSCAPE LIGHTING	光	ID
103	欧州ランドスケープのニューウェーブ	海外事例	ヨーロッパ(欧州)
104	人と都市を繋ぐ緑のランドスケープ	緑化	都市
105	地域に開かれたキャンパスランドスケープ	建築・施設	キャンパス
106	コンパクトシティとまちづくり	まちづくり	コンパクトシティ
107	シルクロード浪漫	歴史文化	シルクロード
108	土木から見たランドスケープ	土木	公園・構造物・造園
109	Urban Green Next 大手町の森	緑化	森林
110	駅前再開発と街づくり	まちづくり	駅前広場・再開発
111	まちを快適にする緑化マネジメント	緑化	マネジメント
112	ランドスケープアーバニズム	都市	アーバニズム
113	震災復興のための「コミュニティ」づくり	災害・防災	コミュニティ
114	公園を楽しむパークマネジメント	都市	公園・マネジメント
115	都市がいきる「パブリックスペース」の活用	都市	パブリックスペース
116	市民が主役のまちづくり	まちづくり	市民参加
117	子どもの遊び場って何？	その他	遊び・公園・幼稚園
118	夜をつくる	光	ID
119	全国都市緑化よこはまフェア	特定エリア	横浜
120	オープンスペースとしての街路・街路樹	街路	オープンスペース
121	公園をもっと使おう	都市	公園・ID・マネジメント
122	全国都市緑化よこはまフェアが残したもの	特定エリア	横浜
123	グリーンインフラ	都市	グリーンインフラ
124	広場建築	建築・施設	オープンスペース
125	キャンパスランドスケープ	建築・施設	キャンパス
126	公民連携のまちづくり	まちづくり	市民参加
127	台湾ランドスケープの今	海外事例	台湾
128	場で生まれるコミュニティ	まちづくり	コミュニティ
129	街をつなぐ再開発	まちづくり	再開発
130	団地再生とコミュニティの再生	集合住宅・団地	コミュニティ
131	街をよくするまちづくり	まちづくり	パブリックスペース
132	暑さ対策	環境・生態系	気温
133	グリーンインフラとランドスケープ	都市	グリーンインフラ
134	地方を豊かにするキャンパスとオフキャンパス	建築・施設	キャンパス
135	団地再生と地域再生	集合住宅・団地	再開発・コミュニティ
136	公園をつくる、つかう	都市	公園・マネジメント
137	災害に強いまちづくり	災害・防災	治水・まちづくり

3. 雑誌『LANDSCAPE DESIGN』における 特集記事の動向

(1) 建築・施設と造園・庭について

建築・施設の分類の特集記事について、建築という分野の性質上、閉じた空間とその直ぐ周辺のものに対象が限られ、他分野との関わりもあまりないようにみえていた。しかし最近では、2018年の「キャンパスランドスケープ」や2020年の「地方を豊かにするキャンパスとオフキャンパス」という特集にみられるように、キャンパスという施設とその周辺の閉じられた空間の話から、キャンパスの外との関わりや地域の話にまで発展し、土木・造園・環境と幅広い分類にわたる記事が組まれるようになってきている。

また建築の特集記事は「造園」の分野との関わりが深く、造園の特集記事からみてもそれが顕著に表れている。造園・庭の分類の特集記事は、建物の内部で行う造園を特集した「インドアガーデンの景」が初出であり、また全5つの特集記事のうち4つが建築分野との関わりがあるとして色付けができた。

造園・庭分類単体で見る特集記事の動向については、1996年の「インドアガーデンの景」のように庭の作庭手法や事例などのハード的視点の特集記事から、2009年の「現代につなぐ庭づくりの精神」庭づくりの精神・思想論などソフト的視点の特集記事にまで広がっている傾向があった。

(2) 都市について

都市の分類の特集記事には、主に都市計画や都市の中の様々な空間(公園、交通に関する空間、パブリックスペース)またはグリーンインフラ等を扱ったものがみられた。4分野の色付けについて、2011年までは多くても2つの分野が含まれるまでであったが、2012年の「緑とオープンスペースの価値」の特集記事以降はグリーンインフラ等3分野にわたる幅広い話題が特集されることが多くなっている。また、4分野に当てはまらない限定的な空間(墓地等)やソフト的な視点からの特集記事が増え

てきており、特に公園についての特集記事は「遊び空間」としての公園や管理・マネジメントに関する特集、または公園の遊具などのインダストリアルデザインについての特集記事がみられ、ソフト的視点で組まれた特集がほとんどであった。これは日本の公共空間におけるランドスケープデザインの基礎をつくったと言われる⁷⁾ほど、景観・ランドスケープとしての公園の歴史が日本では長く、他の類で見られるような注目される視点のハードからソフトへの移行が既に進んでいるからではないかと推測する。

表-3 分類と特集数

分類	特集数
都市	24
特定エリア	16
まちづくり	14
建築・施設	12
技術・機能	12
集合住宅・団地	9
緑化	9
海外事例	9
環境・生態系	7
造園・庭	5
光	5
災害・防災	4
その他	4
歴史・文化	2
森林・里山	2
街路	2
土木	1
計	137

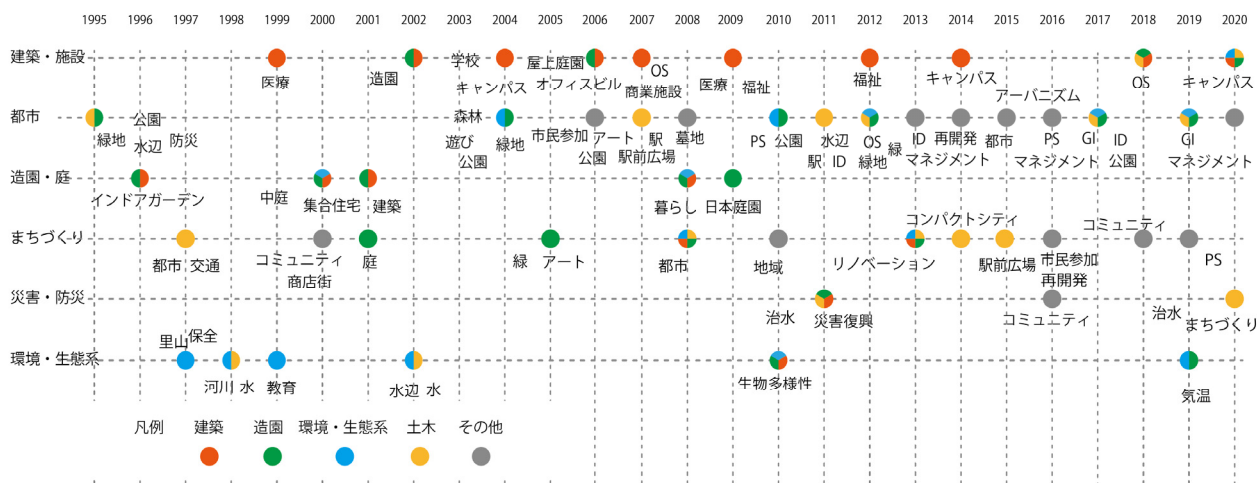


図-1 特集記事の動向

(3) 環境・生態系について

1997年の京都議定書の議決のように地球温暖化などの環境問題についての取り組みや議論がなされている近年、環境・生態系の分類においては里山・河川・水の環境デザインから、環境教育・保全活動まで幅広い視点から特集記事が組まれていた。特に国際生物多様性年であった2010年には、「生物多様性」についての特集が2号に渡って組まれるなど景観・ランドスケープにおける環境・生態系の重要さがうかがえた。一方、2019年の「暑さ対策」まで9年間環境・生態系の分類での特集は組まれておらず、生物多様性の特集記事も組まれていない。雑誌としてトレンドを抑えた特集記事が組まれることは当然であるが、環境問題が年々深刻化しているいま、一時的なものに留めず継続的に特集を組むべきではないかと感じた。一方、4分野の色付けからみると、各分類で環境・生態系の話題が扱われることは比較的多い傾向にあることが分かった。

(4) まちづくりについて

まちづくりの特集においても、交通や都市計画から市民参加、アート、コミュニティなど幅広い話題が取り上げられていた。4分野の色付けについては、土木や造園の1分野のみに当てはまるものや4分野に当てはまらない特集記事が8割以上ある中、2008年の「景観と「まちづくり」」と2013年「街をリノベーションする」では4分野にわたる内容の特集が組まれており、他の分類とは動向が少し違ったものになっていた。

(5) 災害・防災について

1995年阪神淡路大震災の際、都市に分類した特集記事「緑と都市の景」の中で、「都市と防災公園」として復興計画についての検証などがされていた。この企画はそのまま連載記事として続けられ、2011年、東日本大震災が起きる年まで、特集記事として「災害・防災」が現れることはなかった。東日本大震災後、同じ年に現地での復興の現状や計画についての特集記事が2つ生まれ、2016年に震災復興についての特集記事が1つ、そして2020年には震災後10年の特別企画と、「災害に強いまちづくり」として初めて震災以外の水害やパンデミックに関する特集が組まれていた。水災害が多い日本においてはもう少し豪雨災害や治水についての特集記事が普段から組まれるべきではないかと考える。

4. おわりに

(1) まとめ

本研究では分野を横断して作品を取り扱っている雑誌『LANDSCAPE DESIGN』の特集記事を対象として、整備された空間における「景観」の意味するものとその動向を明らかにすることを目的として分析を行った。以下に結果を示す。

・建築・施設と造園・庭の特集記事はお互いに関連する

内容が多く、建築・施設では閉じた空間の話からその周辺やさらに広い範囲での話へと視点がマイクロからマクロへ広がっている傾向が見られた。

- ・造園・庭の特集記事では庭の作庭手法や事例などのハード的視点から、庭づくりの精神・思想論などソフト的視点へと広がっている傾向がみられた。
- ・環境・生態系の分類について、重要な機会には特集が組まれているがまだまだ少ない状況にある一方、4分野の色付けを見ると環境・生態系の話題を取り扱う記事は増えているようにみられた。
- ・災害・防災の特集記事について、震災以外の災害に関する特集が2020年に初めて現れていることから、まだまだこれから発展すべき分野であると考え、

(2) 今後の展望

今回は記事の概要やキーワードから分類を行い、その動向の可視化を特に特徴的であると判断した6分類で行った。今後より精度のある分析を行うためには、他の分類における動向の可視化、またそれぞれの作品ごとに踏み込んだ分析の必要がある。

参考文献

- 1) 中村良夫：風景学入門，中央公論社，1982
- 2) 柴田久，斎藤勝弘，池田隆太郎：「目的別系譜図にみる景観研究の動向—08年から17年を対象として—」，景観デザイン研究講演集No.14，2018
- 3) 上原三和，山本集輔：「Landscape Ecology(景観生態学)とLandscape Architecture(造園学)の学会論文の共通点と課題点—計画・参画・災害の観点から—」，2016
- 4) 奥山信一，持田英明，坂本一成：「戦後『新建築』誌にみられた建築家の創作の主題」，日本建築学会計画系論文報告集第454号p77-86，1993
- 5) 熊倉早苗，柴田昌三：「英国園芸雑誌ガーデナーズ・クロニクルからみた日本庭園に関する記事内容の推移」，ランドスケープ研究(オンライン論文集)Vol.12p45-49,2019
- 6) 丸茂喬編：『LANDSCAPE DESIGN』マルモ出版.1995-2020
- 7) 武田史郎ほか編著：『テキストランドスケープデザインの歴史』学芸出版，2010